
週末限定ハイテンション

迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

週末限定ハイテンション

【Nコード】

N 8 1 1 1 R

【作者名】

迅雷

【あらすじ】

「私に推理なんて無駄な行程は必要ない」

少しおバカな高校生京極 恭吾と、その幼なじみの自称美少女高校生探偵高貴 沙耶が繰り広げる、探偵もの。

処女寝台 1 (前書き)

まったり更新中。

処女寝台 1

珍しいこともあるものだ。小鳥の囀りが目覚まし時計の代わりを果たす、まるでお伽話のような目覚め方をする日が来ようとは。そうは言えど、まだ起きるには早いと軟弱な考えを抱きつつまどろみに溺れる彼女は惨めな存在に過ぎないのだろうか。彼女も所詮この世に生きる者である。春先になるつれて睡眠欲が増してしまうのが自然なのだ。春眠暁を覚えずと言うが、それは的確に今の彼女を表現している。なかなか起きない理由とえば、この中途半端な感じが良いんじゃない、と言う人もおり、彼女もその内の一人である。気怠さに負けて、ごろり、と寝返りをうてば視界に入ったのはさらさらな髪と可愛い寝顔。

愛おしい。一生分の可愛らしいを、あなたに、今すぐに、その小さい耳の側で、囁きたい。起きていないから、どうせ聞こえないだろうけど。

彼女は言いかけた言葉を飲み込み、おはよう、と言う。

言葉は言葉として認識されない。目を閉じたまま起きない。彼女は何も言わなかった。何も言えなかった。彼女はそれをもどかしいと思わない。

彼女にとってはそれで満足だったのだ。それ以上を望むのは、あまりにも強欲過ぎる願いだと自分に言い聞かせて、彼女はハンガーに掛けられた制服に手を伸ばした。真っ白いYシャツと胸には刺繍が施された紺色のブレザーとスカートだ。

それらに着用し、立てかけられた鏡でさり気なく自分の髪型を確認する。その後、横たわる者へと視線を移す。名残惜しい気持ちは捨てきれない。でも、残念ながら今日は月曜日だ。

もちろん彼を愛しているが、今はそれを忘れてすぐに頭を切り替える必要があった。

この秘密がバレてはいけない。

何かなんでも。

さて、今日の朝食は何だろう。パンか、ご飯か。それとも麺が盛り付けられているのか。今日の天気はどうだろう。晴れか、曇りか。それとも雨が降るのか。

至極どうでもいいことを考えながら階段を下りる。

episode 1

処女寝台

吊革に捕まる彼は電車に揺られ、隣りにいた頭の薄いおじさんにぶつかる。すみませんと蚊の泣くような声で呟くが、どうやら聞こえなかったようである。気まずい。いえいえこちらこそすみません、ぐらいあっても良いんじゃないかと期待していたのだ。気まずさは彼に瞳を閉じるという選択を余儀なくさせた。

彼、京極恭吾には親友が少ない。そもそも友人も決して多いわけではないが親友と呼べるほど仲が良い奴と言え、それこそ手の指で足りる程になってしまふ。高校生になり、表面上では付き合いが増え、内心を探るような深い付き合いが減ってしまったのが原因だと恭吾自身はそう解釈している。

恭吾は再度考えて、至った結論に首を捻る。

までまで、いや、そうじゃないだろ。浅い考えは否定しよう。厳密に行こう。

そつだ誰かと触れ合い、交流を深めることを恐れていたのかもしれない。

れない。なるほど。人生で一度しかない青春を掴み損ねたわけだ。

恭吾はまた溜め息をつく。

高校化学で言うに、不可逆定理に等しい。変化後に変化前には戻らない。一度過ぎ去ってしまった青春が、この身に帰ることはないのである。

恭吾のほぼ真下から声がした。

「恭吾は高校生だろ」

「まあそうだけどな」

恭吾の親友といえば、恭吾の前の彼女もそれに含まれる。そういえばお前もいたよな、と忘れかけるぐらい長い付き合いなので、今まで気付かなかったのだ。

恭吾は目の前の親友を睨んで返す。親友は睨む視線を滑稽に感じたのか、微笑む。

スラリと黒く長い髪は、姿勢の良い彼女にはとても良く似合う。おまけに成績優秀ときている。前髪は眉の辺りで切りそろえられ、その直ぐ下の大きな瞳は恭吾を捕らえ、一向に離さない。清潔な人物像を惜しみなく周囲に醸し出す彼女の名前は高貫 沙耶という。

沙耶には秘密がある。それを隠して生きている。

沙耶。お前の生き方って疲れないか？

親友の微笑みが止んだ。移り変わった表情は、はつきりと不快を表していた。

「疲れるし。嫌い」

「そっか。やっぱりな」

隣りのおじさんが咳払いをした。わずわらしいと考えてるんじゃないだろうか、と恭吾は思う。と同時に他人の会話ほどつまらないものはなく、おじさんも気まずいと感じているのかもしれないとも思う。

ともかく、特に重要なこともない。どうせなら終点までずっと黙っていようと決めた。

その決断に声が水を差す。

「黙るなよ暇だろ」

「うるさい」

「まあ何を考えてるかぐらいなら分かるけど」

「うるさいってば」

「バーカ」

この野郎。

恭吾が見つめる車窓からの景色は、とつくの昔に見慣れたものだ。ビルが立ち並び、鳩が飛ぶ。

その内の一羽と目が合った気がした。平和の象徴。最近では鳥インフルエンザで迫害されているが、それに変わりはない。

鳩、お前はそんな小さな頭で何を考える。まさか電車で勝ちたいのか。お前じゃどんなに頑張っても追いつけないだろうに。

昼休み。学校生活において、恭吾にとって楽しみな時間の一つである。窮屈な勉学の時間から僅かな時間だけ解放され、それぞれの活動に勤しみ——とは言っても、クラスの大抵はお昼御飯に舌鼓を打っているのだが——ここには個性豊かな少年少女が通っている。よって当然ながら中には例に当てはまらないイレギュラーも存在する。例えば、その前の授業を睡眠時間に割り当てた者。このクラスには一人。残念ながら、恭吾のことだ。恭吾は皆とこの楽しみを享受しようと思っっているのだが、その時間はごく短時間に過ぎない。

更にたちが悪いことに、寝ていたくせに綺麗なノートを作ろうとしていて、時間が他の人よりかかる。恭吾の綺麗好きのせいであるが、治すという気はない。別にそれを苦に思わないので、ほぼ毎日食べ始めるのが遅くなる。

それに拍車をかけるように今日はあいにくの授業変更で、国語から数学に変わっていたのだ。内容の3割も理解できていない長い数式を書くのは、流石に億劫だと感じ始めていた。誰の手でも良いので借りたい。もちろん猫ではなく人間の手を、と恭吾は辟易していたのだ。

要するに、早く終わらせて飯が食べたい。

「やつこさん。弁当食べんと」

後ろから声がした。女性特有の甲高い声だ。いつも弁当を食べる仲間の一人……ではなかった。あくまでも比率での話だが恭吾には男友達は多いが、女友達は少ない。

「こちとらノート作りだよ。お構いなく」

「自分が悪いんちゃいます」

「まあな」

「んだすべ」

「てかコロコロ口調を変えんな。最近覚えた方言を自慢したいだけか？」

手に握るシャープペンシルを投げつける衝動を抑える。抑えることができたのは、それが女性を傷つける行為だからかまたは犯罪に繋がるからか。

恭吾の短気は厄介しか呼ばないことは本人が一番知っていた。自分のことは自分が一番分かるだろう。落ち着けよ。恭吾はやりどころに困った腕を下ろした。

ショートカットの少女が菓子パンを口にして、微笑む。イチゴジャムのコッペパンが彼女のトレードマークとして機能する。

茶化した雰囲気はどこかに追いやり、少女は普段の口調に戻して言う。

「恭吾さん。さっき沙耶が呼んでた。私は呼んできつて頼まれたわけ」

「沙耶が？」

頭に浮かんだのは、変な企みをもくろみ嫌な笑顔をした沙耶の姿だ。沙耶の素晴らしい容姿であれば何かと淫魔の方が嬉しいと言えばそうなのだが、何故かこういう時は悪巧みをする小悪魔と良く被る。

生返事をして、答えに困る。

朝のこともある。できれば早く行きたい。でも無理だと恭吾は反射的に悟った。

恭吾はまだ半分程度しか書き終わっていないノートを見つめた。

「まだ終わってないしな」

クラスが何やら騒がしい。また“あの阿呆”が騒いでいるのだろう。

「それなら私がやっておいてあげる。私なら、もう食べ終わる頃だし。それに沙耶さん怒ると怖いから……恭吾さんには早く沙耶さんのところに行つて欲しいかな」

「おいまてよ。その言い方だとまるで俺が邪魔者じゃないか」

俺は、破天荒少女暴走抑制機じゃないっての。

少女は驚いた顔をする。まさかそんな訳ないとしても伝えたいのか、おまけに肩まで竦めた。そして、菓子パンの袋を取り出して、恭吾に押し付けた。

美味しそう、と恭吾の思考が一瞬だけ逸れた。

「良いから行きなさいよ」

「……遅い。ここにいます」

ここで第三者が介入を開始。クラスが騒がしいのも何か関係していたのだろう。恭吾が知らぬ間に沙耶が来ていた。

沈黙へて沙耶が口を開く。この様からだ、まるで沙耶が随分待たされていたようだ、と恭吾の頭の隅に浮かんだ考えに沙耶が承諾を下す。

「恭吾。言っておくけど、私は随分待った。ノートをとるのが遅いとは聞いていたけど、まさかここまで遅いなんて知らなかった。まるで蛞蝓か蝸牛が通るようなスピードだね。加えてそれらが這いずり廻ったような酷い字だ。そう。私はくだらない理由で待ちくたびれたからかとても苛々している。どうしよう?」

「どうしようか。取り敢えずお前の兄貴の渡さんに頼んでサンドバツクでも貸して貰えばどうだ。インテリ系な顔してるけど、そういうの持ってるよな」

「兄貴は駄目だ。愛しの彼女と四六時中べったりだからな、できれば邪魔したくない。てか今の兄貴は夢中になり過ぎて逆に気持ち悪いレベルだ。S度も一気に下がってしまっただけで詰まらなきこと限りなし。あーあの女よくもうちの兄貴を誑かしやがって。靴の中に画鋲でも入れるか」

「そうだそうしろ」

「よし、侑稀。恭吾を借りていくからな。ノートは任せたぞ」

「はいはい」

軽く返事をして少女が恭吾を押しつけて着席する。話の脈絡が見えないと錯覚したのは恭吾だけだった。

普段、沙耶が強行的な態度を取る時は、何か事件があった時だけだ。次の行動は、分かりやすい。

「恭吾の想像通りだよ」

「早退かよ。先生に言っただけで来たんだろうな?」

「うるさい。いいから来い」

こういう馬鹿は一回、振り回される身になることを経験させるべきだと、恭吾は脳内計画の内に書き込んだ。

そうして進路指導室。大した理由もなしにワクワクと期待する感情が底から浮き上がるのは、きっと成績優秀な方達だけだ。恭吾の場合は違う。断じてそのような感情を抱いた時がない。

照明は薄暗い。棚に陳列された物もなく（なら何故棚があると疑問に思う）、机と二組の椅子があるだけだ。ここに入る度に、悪い

ことをしてしまったのが原因で取り調べられる気がしてならない。
恭吾が近場の壁に寄りかかるように立つと、沙耶は頷いて、部屋のカーテンを閉めた。

「で、案件は？」

恭吾の声は部屋に吸い込まれた。ここは反響し辛い部屋である。

「誘拐された少年を探して犯人も特定しろ、だど。まあ大体少年と誘拐犯の目星も付いてるし、楽と言えば楽だ。うん、私は楽」

「ホントに楽勝か」

「私を疑うのか。ほう、この私を」

「そうか。じゃあ呼ぶ必要ないじゃん」

「待て待て。でも厄介なんだ。犯人の目星が付いてるって言っただろ」

「ああ、言った」

「誰だと思う？」

「誰だよ」

沙耶の目がずっと細くなる。

十分に躊躇した後。沙耶は声を潜めてつつ、短い単語を呟いた。

「湯原侑稀」

嘘だろ。まったく理解できない。恭吾は自身の理解力が誉められるほど良くないことを知っていたが、それでも頭が真っ白になることはなかった。しかし今回は特別。何せ自分のクラスメート。それも先程まで自分達と会話していた人物だ。柄でもなく取り乱し、恭吾は確認のために訊こうとするが。

「残念なことに確実だよ。しっかりと読んだからね」

沙耶が先に答えた。

「動機は？」

「読めなかった。自分自身で鍵を掛けて他人から容易に読めないようにしてる。小さな断片すら難しい。いや、不可能だろうね」

侑稀は明るい性格だ。そして誰に対しても優しい。クラスのムードメイカーとして、いつも楽しく振る舞っていた。女子と男子とでは多かれ少なかれ違いを持って接していたと思うが、それは気にな

らない程度。普通の高校生だ。

そんな彼女が、少年を誘拐。

信じられるわけがない。侑稀の普段の様子からというのもあるが、ただの女子高生が誘拐なんて果たして可能か。どう考えても無理が生じてしまう。

「嘘じゃない。勘だけど、唐突な犯行だったのかな、と思う」

「捕まえるのか」

「そこが悩み所。侑稀は未成年だし何より私の友達である。誰かを殺したわけでもないし、できれば揉み消してなかったことにしたい」
「さらつと爆弾発言。依頼無視」

「ふふふ、それで良いんだよ。少年さえ見つければ文句は言わないさ。私から恭吾に依頼したい。侑稀の隠す秘密を知りたい。知った上で、もう止めるように説得し、少年確保を手伝ってくれ」

「信頼してるもんな」

「侑稀を？まあそうだろうね」

「説得して分かり合えるって信頼してんだろ。そうじゃなきゃ、いつものようにさっさと通報してたら」

「でも、私も驚いてるんだ。最近違う、まさか、と思ったらそのままさかだつたなんて。あの会話の短いやり取りで読めるなんて私も……」

……

思っていないかったわけか。

沙耶は正義感が強い。しかし、相手は友達。沙耶は葛藤しているのだろ。誘拐犯と認めるか、認めないか。まだ救われるべきか、救われたいべきか。判断を下すのにはあまりにも情報が少ない。いつもよりも小さく映る彼女の姿を見る限りでは、そう悩んでいるように恭吾には思われた。考えが分かるというのも考えものだ、しみじみ感じた。

「俺は侑稀はクラスメートだから何かと接点も多い。動機と手口は任せろよ」

「私は過去に探ってみる。それと気を付ける。侑稀の人間性を疑う

わけじゃないけど、侑稀は何かしてくるかもしれない」

「男だぞ。いくら相手が運動部と言っても高が知れるだろ」

「違う。腕力や脚力だったらまだマシだ」

この殺風景な部屋には、ホワイトボードが備え付けられている。

マーカーを手に取り、数字を書き上げる。25。この数字の意味を訊いているのだろうか。

「25時間」

「そんなの事件じゃない。もっと長い」

「25日か」

「正解」

確かに異常だ。立派に事件としてなりたっている。それにしても、誘拐にしては長い。監禁か。世間の話題にならないのが不思議なくらいだ。

「そう、どこかに監禁してる可能性がある。今まで警察に届けがなかったのには理由がある。代金請求がなかっただけじゃない。その誘拐された子が、お偉いさんの隠し子だからだ。だから表沙汰にできず、今の今まで秘密裏に処理することしかできなかった。もう秘密裏では我慢の限界だったんだろ」

そのお偉いさんは、たぶん政治家なんだろうな。

「その人達もまさか犯人が女子高生だとは、思ってたんだろうな」

「そのまさかなんだ。加えてしかもあの侑稀が。正直言って私だってびっくりだ」

呆れたように沙耶は溜め息を零した。

結局、早退の話はなかったことになったが、その後、侑稀からの質問（何の用だったの？ まさか告白？ 等々。）に恭吾はポーカ―フェイスで答えるハメなり、この時より一層疲労することになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n81111r/>

週末限定ハイテンション

2011年3月21日21時40分発行